日本の植物との出会い

出島を介して伝えられた日本の植物

出島を拠点とした博物学的研究

出島は、江戸幕府の鎖国政策の一環として長崎に築造された人工島（面積約 1.5ha）です。1636 ～ 39 年には対ポルトガル貿易、1641 ～ 1859 年にはオランダ東インド会社を通じた対オランダ貿易がこの島で行われました。オランダ商館員として日本滞在中に博物学的研究を行った人々がいますが、中でもケンペル、トゥンベリィ（ツンベルク）、シーボルトの 3 人は「出島の三学者」とも呼ばれてよく知られています。

右図：イサーク・ティチング画「出島図」（Wikimedia public domain）
イサーク・ティチングは、オランダの医師で 1779 ～ 84 年の間に 3 度にわたりオランダ商館長として来日しました。

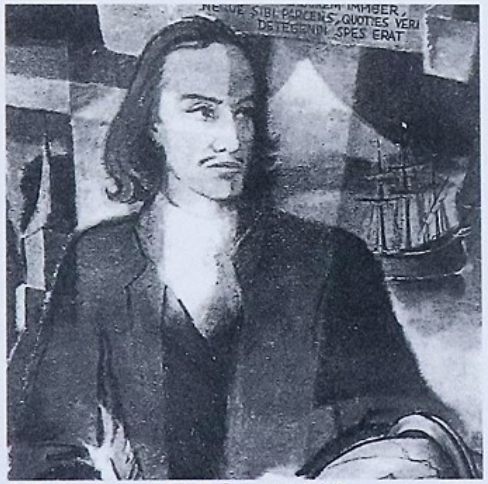
日本の植物の先駆的研究

出島にはケンペルらに先立って日本の植物を研究していた人がいました。クライエル（1634-1698 頃）はドイツの医師で、オランダ東インド会社に入り、1682 ～ 83 年、1685 ～ 86 年の 2 回にわたり出島のオランダ商館長として来日しました。クライエルは日本の画家に描かせた植物画約 1,360 枚をドイツ・ブランデンブルクに住むメンツェル（1622-1701）に送りました。当時のドイツの学術雑誌「Miscellanea Curiosa（Dec.2：v.8, 1689）」には、クライエルが送った植物画をもとにしたメンツェルの日本植物レポート（下図）が掲載されています。

上図：ヤマユリ・カノコユリ図（メンツェルによるクライエルの図をもとにした日本植物レポートより）（Miscellanea Curiosa, sive Ephemiridum Medico-Physicarum Germanicarum Academiae Naturae Curiosorum.Dec.2 : v.8, 1689）（Biodiversity Heritage Library）

鎖国下の日本を詳しく報告

エンゲルベルト・ケンペル（1651-1716）はドイツ北部レムゴーの医師で、ロシア、ペルシア、バタヴィアなどを経由した後、オランダ商館付医師として 1690 ～ 92 年の約 2 年間出島に滞在しました。1691 年と 1692 年には 2 度にわたって江戸参府に随行し、5 代将軍・綱吉（つなよし）（1646-1709）にも謁見（えっけん）しています。滞在中、日本の博物学的研究に取り組み、自ら描いた植物画を含むコレクションとともに 1695 年にヨーロッパへ帰還しました。その後、当時のペルシアを中心とするアジア諸国の現状を報告した著作「廻国奇観（かいこくきかん）」（Amoenitates Exoticae）を 1712 年に出版。同書には日本の植物に関する記述があります。イギリスの医師・収集家ハンス・スローン（1660-1753）はケンペルの遺品・遺稿を買い取り、それをもとに「日本誌」（The History of Japan）をまとめ、1727 年に出版しました。



上図：シュルツ・ゾラウ画「ケンペルの肖像」
（上野益三著「博物学の時代」1990 年、八坂書房、P.28 より）

「廻国奇観」に載るケンペル自ら描いた植物画にはクライエルの植物画と同様に日本語による植物名が添えられています。当時はカール・フォン・リンネ（1707-1778）が 1753 年に「植物の種（Species Plantarum）」を出版するより 40 年あまり前であり、二名法（または二命名法。生物の学名を属名と種小名の 2 語のラテン語で表す。）による学名表記はまだ普及していません。しかし、植物画の正確さはその植物を同定するに足るものであり、リンネは「植物の種」のなかで「廻国奇観」の植物から 20 種以上を新種として命名しています。

Fasciculus V. 845

Jamma Buki alter, flore capitato Bellidis majusculo, luteo, pleno, fine staminibus.

柳楊类 *Bioru*, vulgò *Bijò Janági*. Salix pumila, flore Ranunculi magno. *Sive*: Androsæmum Constantinopolitanum flore maximo *Wheleri*.

莫辛 *Sini* & *Confusi*, vulgò *Kobus*, al. *Side Kobusi*. Arbor sylvestris Tulipifera, Cerasi magnitudinis, ramis rarioribus tortuosis; cortice scabro Camphoram redolente; folio Mespili; floribus primo vere ex lanuginoso folliculo ante folia nascentibus singulis, Tulipam Liliumve album vulgare petalorum numero & magnitudine exprimentibus, dorso versùs basin erubescente, stylo medio crasso turbinato vel conoide, denso apicum longorum agmine stipato. Dicitur vulgo etiam *Mokusitzqua*, *Kisinqua* & *Jokuranqua*.

蘭木 *Mokkwurèn*. Frutex Tulipifer priori congener, ramis raris inconditè divaricatis; foliis plerumque nudus citò deciduis; surculis circa extremitatem pinguioribus & crebris geniculis deformatis; flore Lilionarcissi rubente.

Mokkwuren flore albo, novem plerumq; petalis inordinatè ac parum dehiscentibus donato, staminibus circa umbilicalem conum rubicundè purpureis.

品蹟鄭 *Tecki Tsjocku*, vulgò *Tsutsúsi*. Frutex bicubitalis densus, flore liliaceo, folio integro piloso, seminali vasculo pentacocco. *Sive*: Cistus Indicus Ledi Alpini foliis & floribus amplis *P. Herm.*

Ooo oo 3 Fru-

リンネの愛弟子が日本の植物を研究

カール・ペーテル・トゥンベリィ（1743-1828）は、スウェーデン・ウプサラ大学のリンネに師事し、植物学・医学を修めました。リンネの企てた「全世界の自然の解明と体系化」という壮大な事業に応じ、ケープ植民地（かつて南アフリカにあったオランダ東インド会社が設立した植民地）での約 3 年に渡る植物調査の後、出島のオランダ商館付医師として 1775 ～ 76 年の間日本に滞在しました。1776 年には江戸参府に随行し 10 代将軍・家治（いえはる）に謁見しています。滞在中に採集した植物を押し葉標本にして持ち帰り、約 800 種の植物を記載した「日本植物誌」（Flora Japonica）を 1784 年に完成させました。

上図：トゥンベリィの肖像（1808 年。スウェーデン・ウプサラ大学蔵）（Wikimedia public domain）

上図：トゥンベリィ著「日本植物誌」よりアオキ（雄木）図（Biodiversity Heritage Library）

左 2 図：ケンペル著「廻国奇観」よりツツジなどに関する記述部分（Biodiversity Heritage Library）